幼児の教育　第93巻　第8号　平成6年8月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

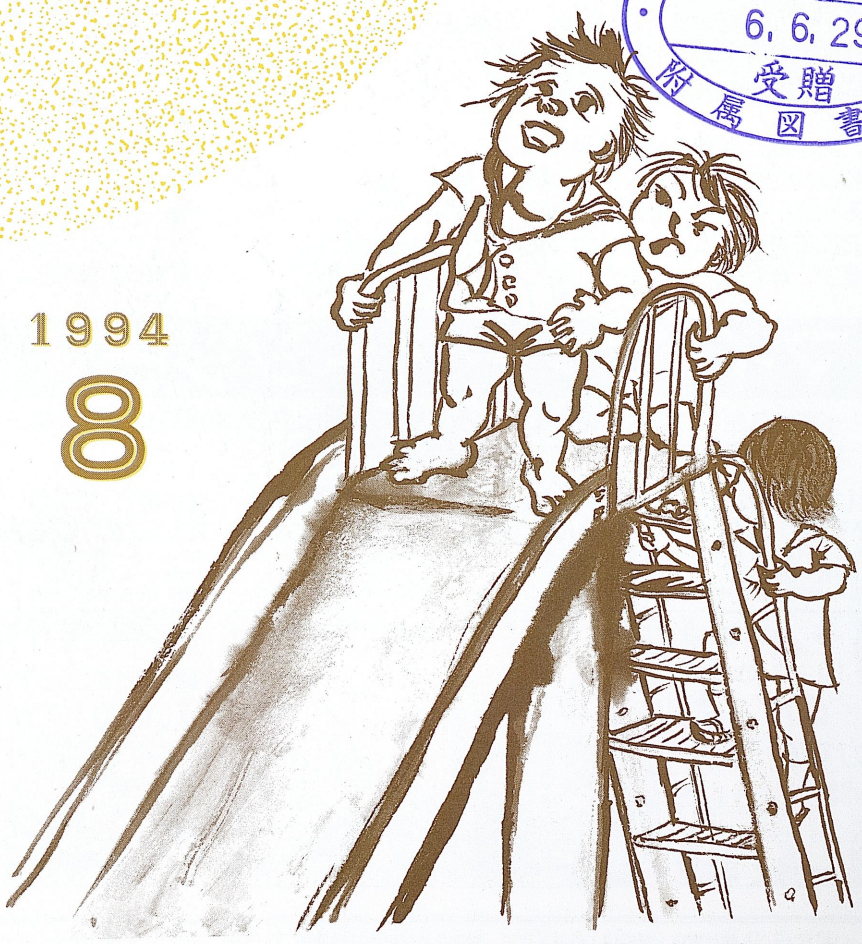
家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

お茶の水女子大学
平成
6, 6, 29
受贈
附属図書館

1994

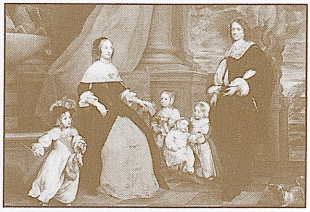
8



第93巻　第8号　日本幼稚園協会

はじめて であう 美術館

ご自由に絵の世界を広げてみてください。
はじめてであう 何かがそこにあるでしょう



この本は、作者、時代、有名無名にかかわらず選りすぐった100点以上もの絵画作品を“季節”“五感”“動物”などの親しみやすいテーマで展開したものです。自由に、そして楽しんで絵の世界を広げられるように、それぞれの絵に、ひとことずつ、俵万智さんのやさしいことばをそえました。

ことば：俵 万智
構 成：ルーシー・ミクルスウェイト
64頁 定価2,000円(税込)

マイ・ファーストシリーズ

イギリス生まれの大型絵本のシリーズです。色あざやかな写真や、ていねいなイラストで、楽しく学べる絵本です。

はじめて であう かずの ほん

マリー・ハインスト／作
杉山吉茂／訳
定価1,500円(税込)　48頁

はじめて であう じかんの ほん

クレール・ルウェリン／作
杉山吉茂／訳
定価1,600円(税込)　32頁

はじめて であう ひゃっかじてん

キャロル・ワトソン／作
しまむら まさえ／訳
定価2,000円(税込)　80頁

はじめて であう えいごの じてん

ベティ・ルート／作
さだまつ ただし／訳
定価2,300円(税込)　96頁

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部 03（5395）6608 にお問い合せください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第93巻　第８号

幼児の教育　目次

――第九十三巻　第八号――

写真・子供讃歌……（4）

いま私の生きている地点から

愛育養護学校と御殿場コロニーと……津守　真…（6）

特集〈緑蔭図書紹介〉

『臨床の知とは何か』……友定　啓子…（12）

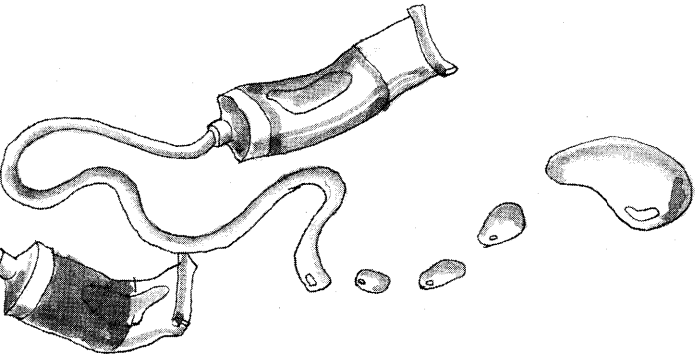
『江戸城の宮廷政治』『江戸お留守居役の日記』……大口勇次郎…（14）

『天皇の逝く国で』……中村　弓子…（18）

『バルーン・タウンの殺人』……中山まき子…（23）

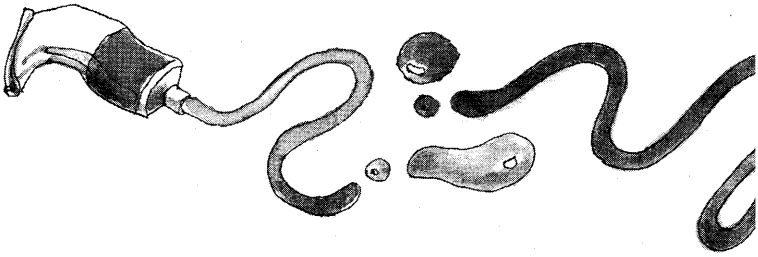
『あやちゃんの贈物』……近藤伊津子…（26）

© 1994
日本幼稚園協会

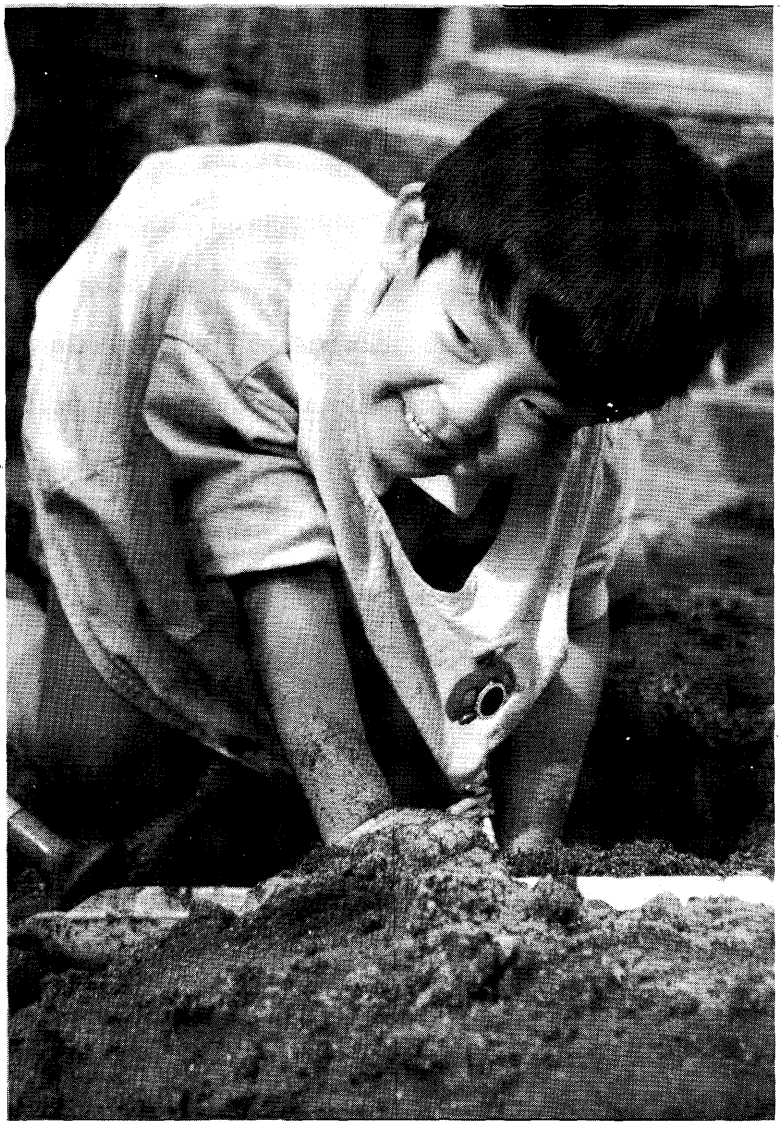


『いやだいやだのスピンキー』他二冊……寺田　京…（30）
『アニミズム時代』……上野　浩道…（33）
子育てと夫婦の連携(3)
自由業パパの敗北宣言……黒須　和清…（36）
ある日の育児日記から(44)……佐藤　和代…（44）
座談会
変わってきたのか　今どきの子ども達……現職幼稚園教諭…（45）

表紙・梅田　なほ／扉題字・堀合　文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田　理恵
編集委員・本田　和子／田代　和美
桝田　正子・田中三保子
編集部・大沢　啓子



子供讃歌



撮影・平野　清

いま私の生きている地点から

愛育養護学校と御殿場コロニーと

津守　真

I

四月の末、A雄を実習生がおぶっているのが目についた。足をぴんとのばしていて、おぶいにくそうだった。しばらくして、彼は、私の背中に来た。おぶいにくい。私の顔をぎゅっと押して、行きたい方向に向ける。こうして緑色の樽のうえに足をかけた。半分私に体重をかけ、半分樽のうえに足を乗せ、絶えず動くので、私も姿勢をとりにくい。おんぶしていいのか、ひとりで立たせていいのか分からない。立たせようとすると体を寄せてくるし、おんぶしようとすると自分の足を樽からはなさない。その動きに合わせて、私も

体を動かす。

そのうちに、私からとも彼からとも言えず、庭の真ん中に歩きだす。丸太の上で、地面の上で、同じようなことを繰り返す。部屋に入る。トランポリンの上で、平均台の上で、同じようなことを繰り返す。おんぶして子どもが安心していられるようになれば、自分で立って自分の行動を選択するだろうと私は信じている。しかしどちらともつかない状態をかなり長い時間もちこたえていなければならない。その間私も過ごしやすいように一緒にふざけたり、私のしたいことを試みたりする。うまくのる場合もあるし、のらない場合もある。うるさく思うだろうというときにはまた黙っておんぶして歩く。何ともおぶいにくい。そうしている間に、A雄はつと庭の木製遊具の階段に足をかけ、私の体から離れた。そしてひとりで歩き回り、てすりに足をかけ、ハンモックの上に自分で乗った。それからあとは、はだしのまま庭を歩き、水たまりに入り、手を水たまりにつけ、自分の足で歩き回った。私は彼が見ることができる範囲に位置していた。

これは子どもが自分で選択して動くようになる、かなり典型的なプロセスである。大人からいうと、子どもの存在の確かさを支え、子ども自身の選択によって次が展開するようにし、それを大人とのやりとりの中で可能になるようにする。A雄は人の正面から話しかける関係を避ける。それによって自分が傷つくことを恐れている。彼はおんぶで後ろから私に接近する。私は、横に並んで、彼の安心感が支えられるようにし、身体の動きに合わ

せることによって彼の能動性を励ます。子ども自身の動きを尊重しようということ以外ほとんど無意識の動きである。このプロセスを無視して、集団生活に合わせようというようには考えない。あるいはいま好きなようにばかりさせておいたら後になって困るだろうというようには考えない。

子どもの身体の動きに対して、すなわち心の動きに対して敏感になること、まずそれに合わせてこちらも動くこと、そして、自分も楽しめるように工夫してゆくこと。そのほとんどの部分は無意識のうちになされる。そのようにかかわっている間に、見えてくるものがある。それはもはや単なる行動の観察ではなく、人間の理解である。全体像の理解であり、内面の理解でもある。

これまでに私はどれだけのことをしてきたか分からない。夜泣きする赤ん坊を抱いて暗い夜道を毎晩歩いたり、べたべたくっついてひとりで遊ぼうとしない幼児といっしょに過ごしたことは数知れない。そのことがあったことによって、その子どもたちは、成人して、自分の足で立って自分自身の人生と積極的に取り組むようになっているのだと思う。未知の未来に向かう自分と他人に対する信頼を基盤にして現在を生きてゆけば、未来は創られてゆくことを私は信じている。

同じことが、大人同士の関係にもあると思う。私共はこの四月から、これまでひたすら

にかかわってきた養護学校の現場に加えて、成人障害者の福祉の現場（注）にもかかわることになった。人生には予定の中になかったことが起きる。

Ⅱ

人間を育てることが課題になる仕事の場で、皆が同じ考え方でいるわけではない。そこが人間を育てる実践の場となるように、互いに新たに学んでゆくことが求められる。どうしたらそれが可能になるのか。現場の状況はひとつひとつ異なるので、一概にいうことはできないが、保育と同じように、そのプロセスでは未来がどうなるか分からぬままに、ほとんど無意識の応答をつづけ、その間をもちこたえるうちに、人間同士の関係がつくられ、互いに見えてくる。ときどき危機の時が訪れる。たとえば、架空の際立った例をいうならば、困った行動をする人がいるとき、社会の秩序を保つために、本人の意思を無視して精神病院に入院させたらどうかという集団決定をするような場合である。私は、子どもについて、これまでに何度もそういう場面に立ち会ったが、大人にとっては大変でも、関係を深める努力をすることによって事態は向上した。このような危機は人間の在り方の根底が露呈される時である。組織を先にするか、個人の人間を先にするかの考え方の選択を迫られる時である。

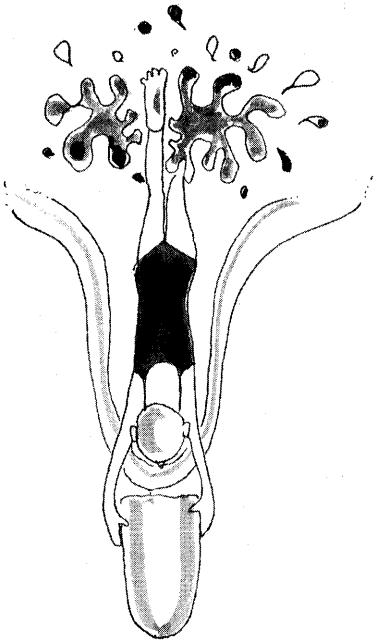
私は戦時中に似たような体験をした。御国のためにという大義名文の前に、個人の生活

は犠牲にされた。私自身も召集令状で三日の猶予の後に入隊するという体験をしたのは一九歳の大学生のときであった。少なくとも表面上は世の中の人々はその考えに従っていた。日本の社会には、組織のために個人を犠牲にするという考え方が根底にあることをそのとき以来私は身に沁みて知った。敗戦とともに軍隊という組織は崩壊した。そして組織は絶対ではないことを、組織は相対的にみてゆかねばならないことを私は学んだ。このことは今世紀の日本に生をうけた者が学んだ偉大な教訓である。軍隊と大日本帝国は崩壊したが、日本の社会には、人間よりも組織を優先させる考え方は、別の形で根強く残存している。教育と福祉の世界でそれは著しい。教育は組織に都合がよいように人間を創るのではない。自分自身をも周囲をも人間の幸福のために創造的に変えてゆけるように人間を育てるのが教育である。歪められた人間が心身ともに開かれて、自分自身を発見するようにするのが福祉である。教育も福祉も別のものではない。

日常の生活の実際にもどって考えると、だれかが典型的な悪であり、だれか典型的な善を代表するというようなことはありえない。だれでもの中にその両者がある。教育も福祉も、実践は理念で動くのではない。他者を身体的行動によって他者の側から理解し、社会的な状況の中で互いに人間として生きられるようにかかわる。これはだれもがある程度やっている。実際の具体的なことでは互いに理解し合う可能性は常に開かれている。

一緒にかかわる場がこのことを可能にする。子どもの保育の場はそれに最適である。皆が保育を通して人間を学ぶ。芸術の場も、自分自身を表現することによって、他者の表現にエネルギーを与える。

注　社会福祉法人野菊寮　御殿場コロニー

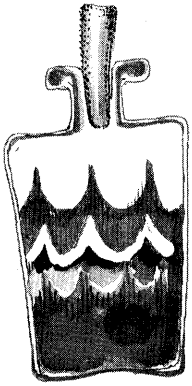


（愛育養護学校）

特集〈緑蔭図書紹介〉

『臨床の知とは何か』

中村雄二郎・著　岩波書店



友定　啓子

私がこの書物をおすすめするのは、幼児理解の方法や保育研究について根本的な示唆を与えてくれるからです。

哲学というと、ちょっと遠慮してしまいそうですが、この本は新書判という手ごろな分量で、しかも著者の数十年の軌跡をふまえて、素人と対等にわたりあってくれます。それは、素人にもわかるように書いたという安易なものではなくて、「生活世界や生命的世界に着地するような哲学は、（日常の）言語にのっとった哲学でなければならない」という言語観に基づいているからです。

中村雄二郎といえば、ご承知のように「共通感覚論」「演劇的知」「パトスの知」など、一連の新

しい「知の可能性」を提唱してきた現代の超売れっ子哲学者です。私自身は、幼児の心性を理解するのに、これらのアプローチは有効だと思ってきました。大人の「合理的」思考とは違う思考回路を持つ異質なあるいは境界的存在としての幼児をどうとらえるかという試みを支援するものでもありました。

しかしそれらをおもしろいとは思いながら、それでもまだ「合理的でないもの」を「合理的にとらえる」という呪縛から解放されてはいませんでした。「いずれ幼児は合理の世界に入る」という「発達観」のもとで、数字で説明してみたり、一義的な因果関係を求めたり、普遍性や客観性にこだわったり、そのために、多かれ少なかれ幼児や保育者自身の生命的世界を退けてきたと思います。幼児の心に深くかかわりながらも、学問や研究の科学的条件を満たすために、私たちは自分のとらえた幼児の心やそれと交流する自分自身の心を語ることを潔しとしなかったのです。今回彼はこの書物のなかで、近代科学が無視してきたもの、それは「生命現象」と「関係の相互性」だとはっきり指摘しています。つまりそれは私たちが日々子どもたちとの間で繰り広げていることは、「科学の知」だけではとらえきれないということを意味します。

著者はそれに対して「個々の場所や時間の中で、対象の多義性を十分考慮に入れながら、それとの交流のなかで、事象を捉える方法」として「臨床の知」を提唱しています。私も子どもや保育に関する知識や理論が、目の前の個々の幼児や生活者としての自分自身を離れてどこか別に存在しているという幻想、または誰かが発見してくれるという期待をここらで棚上げにしてもいいような気がしています。

「実践とは、各人が身をもってする決断と選択を通して、隠された現実の諸相を引き出すことなのである。そのことによって、理論が現実からの挑戦を受けて鍛えられ、飛躍するのである」この意味で、実践が理論の源泉であると著者はいっています。そこで要求されることは、各人が子どもとの間で体験していること、あるいは実践していることを、自分の「ことば」で語ることだと思います。「客観性」の中に逃げ込まず、理論の名のもとに表現を貧弱にしないことだろうと思います。したがって、それにふさわしい知の共有のしかたも開拓する必要があると思います。

またこの本は、おもしろい指摘がたくさんあります。たとえば「パトスの知」とは「受苦の知」という意味です。私はこれを、子どもと自分がずれてしまって、しようがなくてあれこれ考え始めることと読みました。もう一つ、「知」とは個人的な形で存在することが基本であるということです。個人的であることを恥じることはないのだということです。読む人によってさまざまに発展していきそうな本です。

それにしても、「臨床の知」という命名は、それぞれの場で生きることばだと思います。

（山口大学）

『江戸城の宮延政治』

――熊本藩細川忠興・忠利父子の往復書状――

『江戸お留守居役の日記』
――寛永期の萩藩邸――

山本博文・著　読売新聞社

大口　勇次郎

江戸時代の大名たちは、一方で国元に城を構えて藩領の村々や城下の町を治めながら、他方では藩邸のある江戸に赴いて将軍のいる江戸城に詰めていなければならなかった。このため国元と江戸のあいだを、一年ごとに参勤交代の制度にしたがって、行列を連ねて往復していたことは誰でも知っている。

では、電話・FAXなどの通信手段のない時代に、熊本―江戸、萩―江戸の間を、一体どのようにしてお互いに連絡し、日常のコミュニケーションをとっていたのだろうか。重要な情報連絡には親書を遣り取りし、簡単な日常事務連絡には役日記という平凡な手段に頼っていたのである。この往復書状と役日記に着目して、十七世紀の幕藩社会を描こうとしたのが、ここに取り上げた山本博文氏の二冊の本である。大名細川忠興と忠利の父子の間で、長い間にわたって遣り取りされた往復書簡を扱ったのが前者であり、萩藩の江戸屋敷にあって留守居役という藩の渉外を担当する役人が長年書き記してきた役日記を取り上げたのが後者

である。

細川家の書簡の方から紹介しよう。十七世紀前半のほぼ五〇年の間に父から子に送った書簡が約二千通、子から父への書簡は約千通が残っている。この他に幕府の年寄や旗本、他藩の大名や家臣たちとの往復書簡を合わせると優に一万通を越える古文書があるという。受け取ったものは現物が、差し出したものは写しが残っているのである。大名の手紙というと、時候の挨拶や茶会の誘い状を思い浮かべるかもしれないが、それだけではなく藩にとって大きな意味を持つものが多いのである。

十七世紀の前半というと、関が原の戦が終わって世の中はようやく平和になろうとしていた。背景になる社会情勢を見ると、大坂の陣、島原の乱があり、鎖国が始まるのもこのころである。外様大名、つまり関が原を境に徳川に従った大名たちは、将軍から絶えずその忠誠を試され、少しのミスでもあれば国替え、取り潰される危険があった。すでに最上氏（山形藩主、二二万石）、福島氏（広島藩主、四九万石）らの大名は、将軍の怒りを買ってこの時代に消えていった。細川氏といえども、いつ同じ運命をたどるか判らなかったのである。

例えば寛永九年（一六三二）を例に取ると、この年一月将軍秀忠が没すると、新将軍家光暗殺計画などという巷の噂が飛び交うなかで、同五月熊本藩の加藤忠広が取り潰しにあい、そのあと十月に細川氏は三十年間続いた小倉の城から熊本に移ることを命じられている。こうした緊迫した状況のなかで、国元に帰っていた藩主忠利の許には、江戸に居る隠居した父忠興から何通もの書状が届いている。それによると忠興は、さまざまなコネを使って将軍周辺からの情報を仕入れて、憶測を

交えて藩の将来を案じ、細川家の対処の仕方を説いている。将軍をめぐる思惑や保身のための大名の行動など、まさに政治ドラマの裏側を描いて実に興味深い。著者は、これをもって「宮廷政治」というのである。

この複雑な政治ドラマを書き上げた著者は、「本分中の会話にいたるまで、すべて史料的根拠を持っている」と自信を持って述べているのは凄い。史料編纂所で史料集を作るのが本務の著者は、古文書を丁寧に読むことにかけてはプロである。そして過剰な空想を重ねることをしないで、史料の欠けたところは、読む人に余韻を残しておいてくれる。

もう一冊の『江戸お留守居役の日記』については、紹介するスペースがなくなってしまった。この本についてはただ一点、第一級の政治史料を使って、根回しとか、裏工作の実態を解きあかしたその腕前が評価され、著者の山本氏は第四〇回「日本エッセイスト・クラブ賞」を受賞されたことを指摘しておこう。またこの作品は、テレビ・ドラマに仕立てて過日放映され好評を得たが、その際古文書を解読している著者の姿も一緒に画面に登場したことがあり、ご覧になった方も多かったに違いない。テレビも悪くはないが、古文書の世界は、やはり文字から入ったほうが臨場感があって良いような気がする。一読をお勧めしたい。

（お茶の水女子大学史学科）

著者の山本博文氏は、東京大学史料編纂所助教授

『江戸城の宮廷政治』一九九三年六月刊　一八〇〇円

『江戸お留守居役の日記』一九九一年七月刊　一八〇〇円

『天皇の逝く国で』

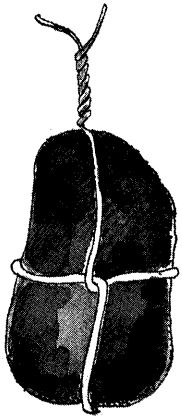
ノーマ・フィールド　著
みすず書房

中村　弓子

本当の批判は本当の愛情があるところにのみ可能であるということを、本書は改めてつくづくと感じさせてくれる。

「私はといえば、二つの世界からおなじように遠いところで宙づりになっている」（本書一一頁）と述べられているように、著者は、戦後間もなくアメリカ軍属文官の父と日本女性の間に生まれ、大学以後をアメリカで過ごし、現在アメリカに家庭を持つ日本文学研究者の女性である。

二つの国を愛すことは、それが深い愛情である場合、単なる足し算ではすまされない。著者がいみじくも「宙づり」と表現したように、それは多少なりとも「引き裂かれ」の痛みを伴う。そしてその痛みの中から、やむにやまれぬ批判が生まれ



るのだ。

私自身、フランス文学研究者である日本人として、私なりにこの「宙づり」「引き裂かれ」を味わってきた。そして、昨年、たまたまパリで一年足らずの研究生活を送る機会を得た折にもそれを鋭く味わうことになった。

フランス人が研究に取り組む際の精神の強靱さと徹底性に改めて深い尊敬を感じると共に、その政治生活、日常生活において、あくまで「自分」の権利を主張する姿勢に、さすがフランス革命以来の「人権思想」の伝統だと感じると同時に、現在の極限的な経済危機の中にあってはもう少し「滅私奉公」的なものがあっても良さそうなものだ、という焦立ちをも正直言って感じた。

パリ生活のあいだ私は、フランス人エンジニアと結婚してこの地に家庭を築いている教え子の家に折にふれて温かく迎えられる幸運を得たのだが、互いに「宙づり」のよしみで、二つの国に対する愛着を表明すると同時に、忌憚のない批判もし合った。

その折に、日本の会社の研究所で二年以上働いたことのある夫たる人が表明した最も鋭い批判は、「日本のサラリーマンは自分というものに対面することを恐れているし、出来ない」ということであった。私はそれを、単にサラリーマンのみにとどまらず、日本人全体にとっての重大な問題点として受け止めた。

また、私の教え子が、フランスに長く生活しているとつい日本のことは美化してしまう傾向が出てくる、と言ったとき、私は、日本の社会では何も深刻な問題がない時は、一致協力してスムーズに事が運ぶ点ではフランスの社会と際立った対照をなしているけれども、ひとたび何か深刻な問題が起こった場合に、集団が進もうとする方向に異

義申し立てをすることは甚だしく困難になり、そのとき起こる「村八分」現象は極めて残酷になりうること、昭和天皇の死の前後に思いもよらぬ速さで社会全体に浸透した「自粛」運動のプレッシャーに、日本の社会の体質が本質的に戦前と変わっていないことを実感してゾッとしたこと、そして日本ではこうした体質は日常生活のすみずみにまで現れていて、この「日常生活のファシズム」が、フランスにおけるのとまさに対極的な日本社会の根本的問題点として存在すると思う、と言った。

そのような次第だったから、日本に帰国してまもなく本書が出版されたとき、私は大いに興味をひかれ、強い共感をもって読むと共に、我が意を得たりという気がした。なぜなら本書はまさに、昭和天皇をめぐる「自粛」騒動のさなかにたまたま日本に滞在していた筆者が、日本の「体制順応主義」的体質を日々肌で感じつつ、その日本の社会の中で、あくまで「自分」を立脚点として考え行動を決定したがゆえに社会全体の「村八分」と闘わねばならなくなった三人の「ふつう」の人々——沖縄国体で日の丸を焼いた知花昌一、殉職自衛隊員の夫の護国神社合祀に抗した中谷康子、天皇の戦争責任発言で狙撃された本島長崎市長の三人——の事件を考察した本であるからだ。

体制順応主義的にではなく考え行動するということには必然的に二つのこと、「記憶」と「罪」の問題が伴ってくると思われる。自身、アウシュビッツの収容所で終戦を迎えたユダヤ系のノーベル平和賞作家エリ・ヴィーゼルは、広島市へのメッセージの中で、「忘れるのであってはならない。忘れるのは簡単だ。赦すことは難しいが、しかし赦すのでなくてはならない」と言った。加害者と被害者ともに、忘れるのではなく、罪を認識

し、そして赦し合うこと。

昭和天皇の病臥中の「自粛」騒ぎの只中での「戦争責任」発言で撤回要求、脅迫の渦にまきこまれた時に本島長崎市長がした次の補足説明は、本島市長における「記憶」と「罪」の観念の所在を示している。

「私は天皇一人に戦争責任があるとはいっていない。責任ある人はたくさんいるし、私自身にもあると思う。しかし今の政治情勢は異常な感じがする。天皇について発言すると何か感情的になる。言論の自由というのは、時や所によって制限されるものではない。……私自身の四十二年あまり勉強してきたことの結果がまちがっているとは思わない。『それでも地球は回っている。』天皇を象徴として尊敬もし敬愛もしているが、それでも戦争には責任がある。」（二二二頁）

その「記憶」と「罪」の観念は、他者に向けられる前に本島市長自身の中に実存的に根ざしたものであり、そのことは右の文にも窺われるが、後に右翼にピストルで狙撃された時に発表したメッセージの次の文の中にはなおいっそう鮮明に読み取ることができる。

「（前略）ああ、これで私は死ぬんだなあと思いました。そして日ごろ考えていたように、こんな時は小さなことを考えないで、神から与えられた人間の使命、それは困っている人や苦しんでいる人に、どの位のことができたかなあという反省でした。また神の教えに背いたことに赦しを求める祈りでありました。（後略）」

これは新聞紙上に発表された時に私が深い感銘とともに切り取って今も手もとに持っているメッセージの一文であるが、この一文は自民党という政治的に保守的な立場にありながらもなぜ本島市長が天皇の戦争責任の問題を「水に流して」しま

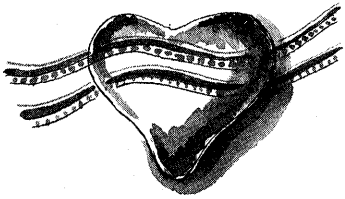
えなかったか、流してしまうべきではないと考えたか、それを他ならぬ「本島等」という一人の人間のうちに説明してくれる。

筆者は「後記」で「私たちにいま必要なのは、国民国家の境界線と経済的利害の閉じた地平を越えたところに立つこと、そしてそこから、二十世紀末の人間にとって、正義にかなう意味ある生活が送れる条件はなにかを問うことだろう。」（三四二頁）と言う。二十一世紀にかけての今後のいわゆる「国際化」の世界は、個人としても国民としても、私たちが「自分」自身をみつめ、真に自分自身を立脚点として考え行動する時に、そして「他者」をもそのようなものとして尊重する時に初めて開かれるものであること、そのことを本書は改めて教えてくれる。

著者はまた「これまでとはちがう世界を築けるという夢を、大人の現実主義の名のもとに捨ててしまうわけにはいかない」（三三五頁）と述べており、本書はいわば「記憶」と「罪」を潜在的テーマとするものでありながらも、来たるべき世代への希望と祈願をもって終わっている。それゆえに本書は子どもたちに献げられているのだ。

「まやとマティのために／そしてこの子らといっしょに／一つの世界をつくっていく／子どもたちのために」

（お茶の水女子大学）



『バルーン・タウンの殺人』他四編

松尾由美・著　ハヤカワ文庫

中山　まき子

夏の一時、あなたのお昼寝をきっと邪魔してしまう、軽そうで重く、それでいて心優しいサイエンス・フィクションへのいざないです。

人呼んで「バルーン・タウン」、それは「やっぱり赤ちゃんをお腹で育てたい」という女性たちが一時的に暮らす人口都市。人間的な都市作りをめざす東京都が設けた特別地区です。今や世の中はAU（人工子宮）が当たり前の時代です、と、奇想天外な着想がまず目を引きます。その科学を駆使した子作り法の一端とは、「子どもを作ることに決めると、まず男女はピルを止め、病院にいって小さな箱型の機械を借り出します。女性の排卵日を知るためのもので、それをもとに毎月適当な日にセックスをし、翌日病院に出かけてい

くわけです。（中略）ここで一連の検査を受け、受精が起こっていれば、胚が子宮に着床する日にそれを取り出す処置を受けます。その後はすべて病院まかせ。胚はAUに、女性は家に帰るというわけです」。

えっ、ナチュラル志向のあなたはもう不愉快になり、「誰がこんな本を読むものか」と思ってしまわれましたか？　食わず嫌いはいけません。逆さ眼鏡をかけた時、世界の見え方は変わります。それは今の暮らしを見つめ直す絶好の機会でもありますから。

殺しです。幸い大人の目撃者が三人もいます。なのに、目撃者たちは、ただ「お腹が大きかった」と驚きの証言をするだけ。そう、妊婦とは、皆同じような服を着て、同じような格好をして、人格というカテゴリーから外された「珍種の動物めいた」生き物。松尾の筆はさらにシニカルです。「ねえ、すごい美人の妊婦なんての見た記憶ある？　本当はいるはずじゃない。少なくとも理屈の上では。けど、いつも気が付かないの。ああ妊婦だな、で済んでしまう。妊婦は透明人間なの。お腹以外は」と。

犯人はバルーン・タウンに暮らす女性であることは明瞭です。だってまともな人々はお腹を膨らますといった醜悪な姿にならず、その日が来たらドレスアップして赤ちゃんを受け取りにいくのだそうですから。この犯人捜査のためにバルーン・タウンに派遣されたのはキャリアウーマン刑事マリナです。妊娠・出産にまったく免疫のない若い男女の感性をマリナに託し、著者は存分に自分の筆先を楽しみ、時折ニッーと笑う姿が私の目に浮かんできます。

この筆者、なんと、一児の母と紹介されています。SFとは無縁に見える自身のお産体験を無駄

にしないどころか、「妊婦探偵、よき器の像（あるいはBE A GOOD VESSEL）、亀腹同盟、流しの助産婦と黄金の指の股、謎を解く鍵は会陰保護」と、妊婦体験者ならではの着想を漂わせるこのしたたかさ。

かつて、上野瞭は『アリスの穴の中で』（新潮社一九八九）という小説で、『男性は本当に女性の側に立てるのか、性の境界を越えることによって人は何処へ行こうとするのか』をテーマに男の妊娠を描きました。この作品は会社課長で短大生の娘を持つ父が、ある日突然自分の妊娠に気付くという設定で始まります。作品は終始、処女懐胎ならぬ童貞懐胎のようで妙に白々しく、努力と、だが感性の限界とが露呈しており、男性の悲しいまでの思考実験を見るような気がします。あるいは小川洋子は『妊娠カレンダー』（文藝春秋一九九一）で、妹の目を通した妊娠の感性を全面に出して注目を浴びました。

両者は妊娠する身体を直視し、その艶めかしさやおどろおどろしさを示した点で斬新な試みであったように思います。しかし妊娠する身体感覚や感性を子産みの思想にまで昇華させるには至らなかったと思います。

小説とSFを並べて云々することはできないのでしょうが、でも勝手な比較をさせて戴けるなら、松尾のそれは、暮らしの中でよく有りがちな会話の中に、実にさりげなくリアルな身体の感覚と、今日の多様な子産みの思想を織り混ぜている凄さがあるように思います。

そのみごとさは、特に第四作品に現れています。この作品は初老の紳士が真夏の路上で「なぜ助産婦に頼まなかったのか？」というダイイングメッセージを残していく場面から話が始まり、事件はやがて国際的陰謀と関わっていることが明か

されていきます。その中で伝統社会の近代化をめぐる問題を、フェミニズムの問題を、出産に関する医療問題を、気負いも衒いもなく作品に組み込んでいます。

例えば、アジアの小国サイラムの女性首相がこのバルーン・タウンで出産することになるわけですが、彼女の国では、過去に妊娠や出産のやり方を徹底的に近代化する政策が取られ、病院で、しかも事実上帝王切開でしか子どもを産むことができなくなってしまっているのです。というのは…。おっと、これ以上は止めましょう。

でもあと一言だけ。一連の作品を通し「あらまほしき妊婦」に徹頭徹尾反抗する未婚の妊婦探偵、小暮美央の姿は、あなたの目にどのように映るのでしょうか。どうぞ彼女の言行に敏感になりながら、しばしば子産みの思想とお戯れください。

（鳴門教育大学）

『あやちゃんの贈物』
――絵に託した生命の輝き――

三瓶和義・正子　編　萌文社

この本は、七歳で逝ったあやちゃんの描いた画集である。四年九か月の闘病の中、少女にもなりきらぬ幼な子が、描画という〝言語〟でさまざまなコミュニケーションをしながら生を全うした証のものでもある。

第Ⅰ部は描画、第Ⅱ部はかかわりを持ったおとな達、看護婦、医師、保育所の先生、小学校の先生、そして母、姉、祖母、叔母たちの追悼のことば、骨髄バンクのこと、第Ⅲ部は父親に依るあやちゃんの年譜にわけられている。

描画はさらに三部に分けられているが、病状の変化との照合のうちに、ただ単に、画才の秀でた子どもという捉え方では、おさまりきれない激しい緊張と、安堵を感じてきた。

近藤　伊津子

七歳を過ぎ待望の小学校入学の頃描かれた「アリさんシリーズ」は母親の付記に依れば〝一時期アリばかり描き続けていた〟という。あやちゃんの元気であった時には、夏の盛りともなれば、自宅の周辺ではいつでも出会えたアリ。自分の体より大きい枯葉や食物らしきものを持ち家路に急ぐ、その行列行進は、どこからか湧き出たものであり、いずこへか往ってしまうもの。あやちゃんは、その行列に、煙のたなびくアリのわが家に終着点をもうけた。

そして「ねずみのふゆごもり」も〝入学した頃、登下校のわずかな時間を惜しむかのように描いていた――あまり熱中しているので疲れるから少し休むように何度か注意した〟とある。

焚き火で暖をとりながら、チーズを頬ばり、カウチに寛ぐふわふわみずみ。

これら日々の営みの姿の小さな生きものたちを精魂込めて描きつづけたあやちゃんは、定かでないかれらの安住の寝ぐらを探し出したいと、願ったのではないか、そして探し出せた、と思ったのだろうか。

あやちゃんは、自分の生に不安を持ちはじめていた時期ではないだろうか。安全に生きのびるところを入手したい、と願望していたろうに。

しかし、やがて天使の描画が始まる。生まれかわってふつうの元気な子になりたい、天に昇り天使になることを憧れていたという。

生の終わりの時機を感知していた。子どもは自己の心理状態についてだけでなく、ときに身体症状についてまで及んで、知り決断してしまうといわれる。

幼い子どもであればあるほどに、おとなのようにあらゆることに抵抗しない故に、病にも、死にさえも、たやすく順応してしまうのでないだろうか。

この雲上に遊ぶ天使たちは甘美でさえある。

星を散りばめる少女や、長衣をまとい優美に浮遊する天使になる自分に陶酔さえしているように感じられる。

生の後の未知の世界を、あやちゃんは、十分に想像・創造し得たのは、読書量の豊かさの故であったのかもしれない。しかし、おとなびた言動のあったことを幾人かの周囲のおとなが記しているように、あやちゃんは、それだけではない——重病で入院を繰り返す特別の立場の幼若患者が急速に成熟していく、特性を示したものでなかろうか。

身体的にはまだ小さい。しかし、かれら自身の

死の認識という点になると、他のそうでない子どもたちよりはるかに、成熟していくのではないだろうか。

この描画集の中で圧倒されたのは「わたしのおかあさん」である。

あやちゃんの描くおかあさんの大きく見ひらかれた瞳は、物静かで慎ましい。

死の近いわが子にそそぐこの母親のまなざしは、悲しみを超越し、その時を受容しようとする優しく、また毅然とした心がひそやかにただよっているように思われてならない。

そして、これは、あやちゃんが、母親と、その時のことを了解しあった瞬間ではなかったか。

母と娘が交わしあったまなざしに驚嘆するのである。

あやちゃんは、あまりにも短かった人生ではあったが、しかし、その生を完全に成就したのでないかと、深く安堵したのである。

（かっこう文庫主宰）
（駒沢女子短期大学）

参考資料

『死ぬ瞬間の子供たち』E・キューブラー・ロス著
川口正吉訳　読売新聞社　一九八二年二月

『いやだいやだのスピンキー』

ウィリアム・スタイグ　作　セーラー出版

『タオのプーさん』

ベンジャミン・ホフ　作　平河出版

『たくさんのふしぎ』

タイガー立石・絵と文　福音館　一九九四年一月

寺田　京

『いやだいやだのスピンキー』

主人公スピンキーが、「誰ひとりわかってくれない」と沈黙の世界にはいりこみ、ハンモックのなかで思い悩み、最後に、ピエロ姿になってみんなを笑わせて、ほろ苦い心の葛藤からぬけだす。スタイグが八十歳のときに書いた内面世界をテーマにした話である。

この話は、四つの点で興味深い。第一に、眉をしかめて目をつり上げたスピンキーの反抗的な自己主張の言動に、子どもが共感を感じるという意外性。第二に、内面の不安や動揺を宙ぶらりんの

ハンモックであらわす象徴性。第三に、大人と子どものかけひきの面白さ。次々と機嫌をとることばにたいして「今ごろ遅い—親切だな—きずつけておいて—世界中がさからうからさからう」というように意識がながれて、やっと「どうやってなかなおりしようか」とめざめる。第四に、ユーモアあふれる解決策を子どもが自分で実行するというアイデア性。

子どもはワクワクしながら、こうした意識の流れを共有する。そして、ひとりで孤独と向かい合う意味をも感じとる。

大人が与える解決策は、本当のところ、子どもの内面にとどいていないかもしれないという危険性も伝わってくる。ごめんなさいだけでなく、心から愛し、理解している気持ちが伝わらないと、相手を動かすことができない一方通行のコミュニケーションになってしまう。

なによりも、時間が解決してくれるのだ。子どもの内なる力で。

『タオのプーさん』

なるほど、「プーさん」を読んだあとの、あのここちよさの秘密がわかった。プーさん独特の明るさ、落ちつき、ユーモアでものごとをプラス思考すると、すべてのことが最小限の骨折りでうまくいってしまうのである。

作者は、プーを通して老荘思想を解説する。そして、「ぼくたち、ひとりひとりに、えっへんフクロ、せかせかウサギ、くよくよイーヨー、プーがいる。しかし、先見の明さえあれば、プーの道を選ぶであろう」と指摘する。

プーの道とは、タオイズムの原理の一つであるあらき（プーすなわち彫られてない木の意味）の

性質が、単純、静か、自然、気取らないものを楽しむことであり、このような生来の力をもつ自然のままの状態や、穏やかな鏡のような心は、まさしくプーと一致するのである。また、カルストンパイは内なる自然をあらわすことや、無為、中和の道がプーの道だという。プーは、報酬を求めず、時間の節約を求めずにプロセスを楽しむ。内面が満ち足りた生き方なのだ。

澄みきった子どもの心で、オリジナルを生きることの大切さや、単純な心で生きる喜びを再確認することができる。自分を知り、認め、信頼し、楽しみ、あるがままの自分を役立てることの素晴らしさ。内なる声を聞くと、知恵と幸福と真実がおのずからあらわれるという。「始まりに帰れ。ふたたび子どもになれ」と。

『たくさんのふしぎ』

親子で絵を楽しめるインパクトの強い本である。

ゴッホ、シャガール、ピカソ、モジリアーニ、ムンク、エッシャー、マグリット、アルチンボイド、国芳などさまざまな画家の肖像画が登場して、人間の顔を美術の観点から学ぶことができる。生きている意味を表現する顔、こころの顔、にぎやかな顔、謎の顔、やわらかな顔、変な顔などがあり、ながめているだけでイマジネーションが湧いて、元気がでてくる。

幼いころにであった絵の記憶は、魂のすてきな宝物となっていつまでも心をゆたかにしてくれるだろう。

『アニミズム時代』

岩田慶治・著　法蔵館　一九九三

上野　浩道

岩田慶治さんの本は、いつ読んでも心が洗われ、やすらかな気持ちにさせてくれる不思議な魅力をもっている。それは私たちがかって経験したにもかかわらず、すでに忘れてしまった懐かしい原風景を蘇らせてくれるからである。

アニミズムとは、太陽がニコニコ笑っているとか、風がヒューヒューとお喋りしているとか、木の枝がオイデオイデをしているとかいったように、ものにも自分と同じように心や魂が存在していると思う心性のことである。それは、ものにも顔があるという意味で心理学では相貌的知覚などと呼ばれ、ものと自分といった自他の区別のできない未分化の状態で、近代の進歩史観からみれば未熟な幼児や未開社会の人々の思惟形態として低

くみられてきたものである。

しかし、岩田さんは文化人類学者として『草木虫魚の人類学』（淡交社　一九七三年　講談社学術文庫）以来、新アニミズムの立場から、このような原初的世界こそが文化の基底にあって創造性をもち宇宙（コスモス）を形成していることを一貫して説いてきた。本書では直接子どもの世界についてはふれていない。だが、豊かなフィールドワークの成果をもとに東南アジアの人々の生活を生き生きと示しているその世界は、まるで子どもの世界を表しているかのようである。また、タイやその他の国で稲には他の植物と違って魂があるという稲魂の行事や思想などの分析は、昨今の米騒動と重ねあわせて読むと、米に特別の感情を寄せるわれわれの心性を解き明かしてくれる内容も含んでいる。

岩田さんのテーマは言語化される以前のカミの世界を扱っている。それこそがあらゆる宗教や芸術の原点であるとする立場である。ところが、それを言葉であらわさなければならぬというジレンマがつきまとう。そこで、最近、もののかたちと言葉とが同時に誕生し、自分とものとが共存して表現できる「絵で考える」という手法を考えておられる。人類学では参与的観察といって相手に寄りそって本質を捉える方法があるが、岩田さんはそれを創造的に描いていく。本書でも、言葉のぎりぎりの表現として詩の形式で述べられていたり、前景、遠景の風景画を見るような画面の描写が随処に出てくる。

前作の『花の宇宙誌』（青土社　一九九〇年）では、花と人間との関わりから宇宙と風景について美しく描かれ、特に、魂の風景として幼児期の原風景のもつ重要性について説かれている。つまり、幼児体験のなかで刻みこまれた忘れえぬ風景

こそが自分を自分として証拠づける重要さをもっていると言うのである。

岩田さんの最近の一連の作品には人生という時間と宇宙という空間の一元化された風景がマンダラとなっている。その風景を読んでいると不思議とこれからの人間の生き方について考えさせられてくる。本書の冒頭での「今日は、木蓮さん」、「今日は、泰山木さん」という庭の木々へのあいさつの風景は読者にとって鮮明である。木々は返事はしないが、泰山木の枝にぶらさがったり、木蓮の肌に触れていると触覚を通して木々の返事がかえってくるという。そして、自然のなかの応答や感覚のやりとりにアニミズムの出発点があるのではないかと岩田さんはみる。近頃、教育の世界で共生ということが話題になる。人間と人間、人間と自然の共生である。昨年の日本教育学会のシンポジウムのテーマは共生であった。本書で岩田さんは、人間と自然の共生をはかる上でわれわれのからだの作りそのものを変えたいと述べている。これはもう、一つの教育論となっている。

（お茶の水女子大学教育学科）

新現代幼児教育研究会
第十五回オンステージのお知らせ
～幼児教育音楽リズム発表会～

日　時　八月二十一日(日)
　　十二時三〇分～四時三〇分
場　所　十文字学園講堂
連絡先　十文字幼稚園　堀合
　　〇三（三九一八）一六六八

子育てと夫婦の連携(3)

自由業パパの敗北宣言

黒須　和清

「自由業なんですか？　じゃ奥さんもお子さんもいいですね。家事は手伝ってもらえるし、いつでも遊んでもらえるし…」どうしてみなさんそう思うんでしょうか。わたしは家でブラブラしてるわけじゃない。ちゃんと仕事をしてるんです。世間のパパたちと同じぐらい、いや、ボーナスなんかないですからそれ以上に働かないと世間並みの暮らしができないわけですよ。男は仕事です。家事と育児はママがやるんです！　と、こう言うと「まあ！　黒須さんたら何て封建的？　男も家事をして当たり前の世に何て合わないことおっしゃるの？」と糾弾されてしまうかもしれませんが、違うんです。よく見てください。わたしはこれを威張って言ってない…ホラ、こんな寂しそうな顔で言っているんですよ…。

わたしの父は家事も育児もまったくと言っていいほどやらない人でした。決して家庭を顧みないわけ

ではなく家族は大事にしておりましたが、母がいないと何もできない。御飯も食べられない。パンツのありかもわからないという有様、そのため、結婚後何と一〇年もの間、母は実家へ里帰りできませんでした。その一〇年ぶりの里帰りすら一泊で帰らせたほどの亭主関白、育児にしても教育にしてもほとんどのことは母がきめていて…尊敬すべきところの多い父もその点だけは情けない、こういうふうにはならないぞと「反面教師」にして育ったこのわたし…台所パパ、育児パパはわたしの理想でした。

「ぼくは自由業で家にいる。二人はいつも一緒だよ。君はなんて幸せ者なんだい。家事も育児も君だけにやらせやしないよ、家の事はフィフティフィフティ！」と、思っていた結婚当初。もともと料理は好きですし、子供の教育にも興味がある、そうじも洗濯も嫌いじゃないし…。その後女房がマタニティライフに入ったときも「今こそ我が輩の価値を見よ！」と張り切って家事やりました。「これこそ自由業パパの特典！　わたしは普通のパパとは違いますよ！」そしていよいよ我が子の誕生…やれオムツ替えだ！　お風呂いれるぞ！　哺乳びん洗うよ！　とにかく初めてのことばかり、新しくペットを飼ったようなものですから何もかも興味深々、「やっぱ男も子育てしなくちゃだめだね」何でもやってみては人に自慢するわたしでした。そして少しの優越感「サラリーマンのパパはかわいそうにな、こんなに一日ベッタリと子育て体験できないもんな、自由業でよかったな…」。

育児にフィフティフィフティを望む理由は子どもにふれあう権利を対等に得たいから、そして本音は「パパとママどっちが好き？」の質問に「パパ！」と答えてほしいというママへのライバル意識…だってどうしても不利なことが一つ、それは「パパにはオッパイがない！」。わたし結婚後の安穏生活で一〇キロ太りましたから、典型Aカップの女房と同じぐらい出っ張ってはいますが中身が無い。正直これ

はうらやましかったです。だってどこにいたって身ひとつで我が子に糧をあたえることができる。適材適所理論でいくなら…ごはんタイムのふれあいの特権はママのもの…これは大きいぞ！　だって「だっこ」はママでもできるけど「オッパイ」はパパでは代われない…いくら自由業で家にいたってどうにもならない…そうなんです。ママは最初から「切り札」持っているんです。負けるもんか！　これに対抗するには…そう！「男は力！」

子どもは一種の「荷物」です。「女より男の方が体力がある」というのが世の常、わたし自称『色男』ですから筋肉モリモリの力自慢ではないけれど、それでも体重三〇ンキロヤセ型の典型の女房よりは確実に力持ち、適材適所理論でいくなら我が子の運搬は当然わたしが専従、おでかけの時の「だっこの特権」は当然わたしのもの…ふれあいのチャンス多し！「パパとママのどっちが好き？」選には確実に有利！　パパは持病の腰痛も何のその、おでかけのときはがんばりましたよ。パパに一票をとるために。

ああそれでも…犬でも小鳥でも子どもでも、やっぱりエサくれる人になつくんですよ。

「育児は競争じゃないわよ」とママは言うでしょ

う。でも「パパとママとどっちが好き?」とたずねるとやっぱり「ママ! だってミルクくれるもの」これは悔しい。だからこちらも負けずに切り札「男は力」ところがこの切り札もだんだん使えなくなってくるのにある日気付きます。

子どもが大きくなってくると近所の公園のお砂場が社交場。砂場にできる子どもの輪。そしてその周りにできる親の輪、何でこの輪はみんなママ? 考えてみれば当たり前。平日の真っ昼間、普通のパパは皆会社、パパの居ぬ間の女だけの社交場、たとえ自由業の名札つけていたって働きざかりの三〇男はやっぱりその輪の中には加われない。かといって女房と一緒に行って輪の傍らで笑っているのもなさけない。だから「遊びに連れていく権利」はいつしかママに移りました。きっと子どもはこう思うわけです。「ママはいつも遊びにつれていってくれる…ママ大好き!」はい、ママ一票。

それならば「叱られたあとのなだめ役」これがパパ?「ママはこわい、でもパパはやさしい」この図式で票かせぎ! でもね…うちのママは甘いんです。いや、別に批判はしません。これはママの〝一見投げやり子育て術〟の作戦で一理ありますからね。食べ物の好き嫌いはうるさく言わない…「わたしもそうだったけどたいした病気もせず今でも元気!」というのがその裏付け。お行儀もそれ程うるさく言わない…おやつが遅かったりして夕食が食べられない我が子に「出されたごはんは残さず全部食べる!」としつけられたわたしはついついうるさく言ってしまいますが「食は義務ではない。体調が優先。楽しく食べるが基本。残したきゃ残せ」というのがママ、「そのかわりあとでおなかすいたって知らん、食べなかった奴が悪い!」という結論。あとでおなかがすいてつらい思いをするのがかわいそうだからむりやりでも食べさそうとするこのパパの「先見の愛」を、子どもはそこまでよんでくれません。「残しても許してくれるママの方が優しい」「マ

マ好き！」となって、はい、ママ一票！　本当はパパのほうが優しいのに…。

よーし「ママが優しい」ならね、「パパは厳しい」路線で尊敬の念でもあおごうじゃないか！　あせってきたパパはもう育児じゃなくただの人気取り。でもこれはいつでも逆効果なんです。特にインパクトのある顔でなければ「女より男の方が迫力がある」のが当然、同じぐらい怒ってもパパの方が断然怖い。脅かすなら断然有利、でも怖がらせてどうする？「家庭運営」には必ずいずれ仲良くしなきゃいけないという条件がありますから、適材適所理論で言えば、「叱るのはママの方がいい」早く和解して家庭の空気を平和に持っていくことが何よりも大事ですからね。だから叱るのはママにまかせておくほうが無難…じゃパパは？…

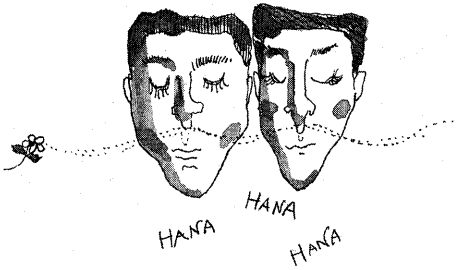
ようやくわかってきました。ママは「育児」にとても有利な存在にできているんです。育児ってママだけでもできちゃうものなんですよ。ママがいればいいんです。ママがいればパパが「サラリーマン」だろうが「自由業」だろうが関係ないんですよ。わたしたちは結局の所「パパはお仕事、ママ育児」これで何の不自由もなく暮らしている「郷」にいるんです。「郷」に入るなら「郷」に従え。しっかり家の運営のできる世間様並みのママがちゃんといるならわざわざ「特殊」になる必要もないんじゃないかな…。パパはそう思ってきました。

「司令塔が二つあると兵隊たちはとまどう」のが道理、ましてやそのひとつが「仕事」というもののおかげで時々しかかわれないとしたらその意思統一たるや面倒臭いことこのうえない。意見主義主張をぶつけあっていくことも大事です。でもそれにエネルギーを費やして運営が停滞してしまってはマイナス、それなら片方が司令官、片方はオブザーバー…司令官はどっち？　やはり育児専従のママ、その方が「適材適所」に違いない。ひとつの荷物を二人一緒に運ぶと二人同時に息が切れてそこでストップ、

でもかわるがわる運べば常に進める…、それも一つの連携のかたちかな…パパはある日そう思いました。

とどめは幼稚園の「父親参観日」。期待してました。うちの子はどんな日常を園で過ごしているのだろう。お歌は元気に歌っているかな？　お遊戯の腕前は？　幼稚園のカリキュラムって自分が通っていた頃とはずいぶん変わったのかな？「いつもの園生活」をみせてくれるのかと思っていたら何と『運動会』でした。「おとうさんと一緒に遊びましょう！」だって。翌年は『工作大会』でした。「なつかしいワリバシ鉄砲や風車をお父さんに作ってもらいましょう！」だって。ただの父子のつどいの日、パパは「親」じゃなくて「特別ゲスト」。終わったあとの懇談会、先生から「おたくの〇〇ちゃんはいつもはこんなで…」とか「もっとおうちでこんなふうにしてみてください」とかママに秘密のパパだけへの情報やご指導くださるのかと思えばなんのことはない「みなさまお仕事お忙しい中ありがとうございました」だって。そしてパパたちの感想会「こんなふうに触れ合いの機会を作ってくださってとっても嬉しい！」ってみなさん感謝してましたっけ。

「パパ」ってそうだったんですね。いや、そうなっ



ちまったのかもしれない。「家からでて外でお仕事する人」なんです。だからママと子ども達が営んでいる日常の「お客さま」、ママ無いときの「非常用家事育児要員」にすぎない。これは共通のパパのお役目…「自由業ならいいですね。家事も育児も力を合わせてできるから…」そんなことないんです。同じなんですよ。同じならまだ会社という遠方に身を置いておけるあなたがたの方が幸せですよ。家事にも育児にも手を出し口を出したいのをこらえながら我が家で仕事をする苦労…。遊びたがって仕事部屋に入ってくる我が子追い出して、その寂しそうな後ろ姿を何度も見るうしろめたさと自己嫌悪…。

結婚九年目、「家事も育児もフィフティフィフティ」とうたっていた自由業パパはついに敗北宣言！　世間の波にのまれてしまいました。女房が働いていたらまた違ったのか、まわりじゅうが「自由業」ならまた違ったのか、勿論世間体など気にせずにわたし自身にもっと己を通す強さがあればこんなさけないグチにはならずにすんだはずなんでしょうが、とにかくわたし、今、非常時以外家事も育児もほとんどしていません。しつけもホント甘いです。いいんです。どうせパパの育児は「オプショナル」なんだから。ママの留守にファーストフードで昼飯食おうがおやつたくさん食べようがゲームセンターで散財しようが…。一日ぐらいそんなことしたって大丈夫、だって栄養だって金銭感覚だって普段はママがしっかりしつけているからね。そうママへの信頼感あるからこそそれができるわけ、パパはひたすら仕事、そして子どもたちと解放区のオプショナルタイムを楽しむ、それでいいんですよ。え？　ヤケになってる？　まあね。それでも、唯一風呂だけはわたしの係りにさせてもらっています。これは育児への未練。このわがままのお陰でママは子どもを寝付かせ自分も寝たあともう一度起きて風呂に入るという「二度寝」を続けているんです。ママが入れる方が家庭運営上では無駄がないのはわ

かっています。でもこれぐらいないと、わたしはただの働きバチ。起きてから寝るまで一度も子ども達と触れ合いなくてどうして我慢できてるんだい世のパパ達よ。とわたしは叫びたい！　ああ…パパっていうのは悲しいものだな。

「別に困ってるわけじゃなし、必要なときはたのむし…そんなときあなたはちゃんとやってくれるからうちは夫婦うまく連携してると思うよ。とにかくあなたは余計なこと考えず仕事してれば」と言ってくれるママはきっと育児上手家事上手の「世界一の女房」に違いないんでしょう。そんな多忙の中でも好きなエレクトーンひいたり「炊飯器のカバー」なんていう別になくたって困らないものを面倒臭いキルティングでこしらえたりしている余裕もあるんだから。昔はパパの役目だった「魚の臓物取り」もいつのまにかできるようになってるし、今パパにおよびがかかるのはゴキブリが出たときだけ、「ああ自由業パパでよかった。だっていつゴキブリがでてきてもすぐ退治できるもん！」これがわたしの存在価値？　近頃ではパートも始め、「仕事」の領分まで進出してきたママ、それに比べてこのわたし、今では物価もわからないし、洗濯の仕方も忘れちゃった。もしまた子連れのチョンガー暮らしをさせられたらきっと三日と持たないだろうな…あ、これはわたしの父と同じだぞ。そうか…もしかすると父にもきっと同じ葛藤があって、努力があって、悟って…そして敗北したのかもしれない…。男三十八歳にしてようやく父の域に達したというわけか…。我が子が大きくなって『幼児の教育』から執筆依頼をうけたとき、きっとこう書くでしょう。「わたしの父は自由業にもかかわらず家事もまったくと言っていいほどやらない人でした。…」と…。

（クリエーター）

ある日の育児日記から

(44)　佐藤　和代

圭は五歳。ずいぶんしっかりしてきて、いろいろお手伝いもできるし、留守番だってできます。ついつい〝おねえちゃん〟扱いして、頼ってしまうこのごろ。……だったのですが。

ここ数日、なぜか甘えん坊で、おねしょや夜泣きまでするのです。いったいどうしたのかな？思いあたることは、と考えると、あったあった。このところ「夏休みにはひとりで泊まりにおいで。」と、おばあちゃんから何度も言われていたのです。大好きないとこのお姉ちゃんも一緒だし、もうお母さんがいなくても大丈夫よ、行ってみようよ！　と、私もけしかけていました。圭は、いやだと騒ぐことはなかったかわり、何となくぐずぐずと、返事をしぶっていたのです。あれかな？　さっそく圭に「もう、ひとりで田舎行けって言わないから。ね？」と言いました。圭はただうなずいただけ。でもその日からおねしょはなくなりました。あたりだったみたいね。

やれやれ、ちょっと背のびさせようとすると、すぐ幼児返り（まだ幼児ですが）するんだから。なんて、圭には悪いけど、夏休みはラクできると思っていた私は少々がっかりなのです。

座談会

変わってきたのか 今どきの子ども達

司会　田代　和美（お茶の水女子大学大）

出席者

A	東京	幼稚園　保育経験	十七年
B	千葉	〃　〃	七年
C	東京	〃　〃	四年
D	東京	〃　〃	五年
E	神奈川	〃　〃	二年
F	東京	〃　〃	二十五年
G	編集部		

（発言順）

◇今どきの子ども達

――今日は、幼稚園の現場経験二年から二十五年という新人、ベテランの先生方六人にお集まりいただき、今どきの子ども達をどうとらえて、どう対応しているか一人一人を大切にするといっても、どの様な形でしていったらいいのかということなどについて、皆さんに

たくさんお話ししていただけたらと思っています。ご自分の保育のこと、子どものことなど、話し合いながら考えていきたいと思います。簡単に結論のでるような問題でもないと思いますので、いろいろ話が聞けたらいいな、という位の心づもりでお話し下さい。ではA先生から口火を切っていただきましょうか。

A　以前と比べるとすごく子どもが変わってきていると感じています。それが私の幼稚園だけの特殊な状況なのか、それとも子ども全体がそういう傾向で動いていることの表れなのか…。私自身、ずっと同じ幼稚園にしかいないので分からないことでもあるのですが、同じ幼稚園だから、この変化が分かる部分もあると思っています。今の子ども達は一人一人が気持ちの中に、何か重たいものをかかえている、という感じが強くなりました。本当にくったくなく遊んでいると思われる子は一クラスに五～六人しかいない。一見、友だちとも楽しげに関わり合いながら生活をしているように見えても、そういう子でも、とても先生との結びつきを求めている。〝気持ちをこっちに向けてよ〟という信号をそこここで出しているように私には感じられるのです。ですから、保育の関わりでも、遊びの援助というよりは、その子の気持ちを受け止めるという援助の仕方にまず重きをおいてしまうことが多いですね。子どもが信号を出していることを私が感じてしまうから、援助の仕方も当然変わってくる訳です。最近は、入園前にプレ教育を受けてくる子も多く、その時代に本当に大事にしてほしかったと私達が思っている部分ではなく、自分の事は自分でできるようにとか、ある技能が習得できるようになる、等の方向づけをされてきた結果がこういう形に表れているのかしらとも思い、またそれだけでなく、世の中のいろいろな変化の状況が今の子ども達の気持ちの中に表れているのでは、という思いもあります。

――似た様な環境の幼稚園としてB先生、いかがでしょうか。

B　私は昨年異動してきたばかりということもあり、やはり特殊性は感じます。一年間受け持った印象では、前の幼稚園（公立）でも一クラス三〇人位で人数は変

わらないのですが、前の地域で何人かいたような感じの子がこちらにはもっとたくさんいて、お母さん達がいろいろプレ教育させている。入園後も続けている子も多いです。ストレートに表現が出てこないとか、とりかかりでもっととびついてもいいのにという所でとびつかないとか、そういう所がちがうと思う。行動がストップしてしまう。具体的にはオニゴッコでもオニになるとすぐ泣く。失敗と思うみたい。〃失敗したらどうしよう〃と考えるのかしら。私のクラスは四歳から新入園の子ばかりなので、三歳までに準備して気合いを入れて入ってくる子が多く、近所の児童館の幼児教室を経験したぐらいでまあ初めての集団生活として入園してくる公立の園とはちがうなという印象がありました。それと何かバランスの悪さを感じます。こっちができるのにこれができない、一体どうなっているのだろうと。

A　先程ストップするという話がでましたが…？

B　○○しちゃいけないかな、と先にブレーキをかける。何かあると体が固まって動けなくなる状態。

――他の幼稚園ではどうのなのでしょうか。

C　一つはお母さんの印象が変わってきたように感じます。年齢から言うと三〇歳前後、ちょっとした普通の言葉のやりとりの中で、気持ちを伝えることがあまりない。子どももそういう大人の生活をもろに受けている。友達に自分の気持ちをストレートに出さずに、他の子を使ってサインを送ったりするとか。今の社会の中でお母さん同士が心を開いて育児の事やいろんな事を話せる仲間がいないということも、直接子どもにひびいている。例えば四人の仲間で何となくいつも一人はずされている状態があったりすると、お母さんまで巻き込んで大騒動になる。お母さん同士の感情のもつれが子どもの人間関係に反映して、子ども達の中がぎくしゃくして、逆に〃友達とケンカをしないために私は一人でいる〃という表現がでてきてしまったり…。ざっくばらんに親同士がぐちゃぐちゃと話をしていたのが影をひそめ、そういう大人の社会の変化が子どもに影響しているように思います。四歳位の子ってよくケンカのような事〃今、○ちゃんと遊びたくない〃と

か、いろいろありますよね。そうやって気持ちを出していく中で、言ってはいけないとか、ショックだったとか、いろんな経験をしていく訳ですが、その経験をしていく前にお母さんからブレーキがかかる。仲良くしなさい、仲間はずれはダメ、入れてあげなさい、そんな言葉で情報として子どもに提供する。そうすると子どもは大人の見ていない所でこっそりとするようになる。去年受け持ったクラスで、心にグサッとささるような一言を平気で通りすがりにポロッという子がいたんです。「○ちゃんの洋服、ヘンなの！」そういう形ででてしまう。遊び方とか子ども同士のぶつかり合いではなく、通りすがりのうっぷん晴らしのような。お母さんのおつき合いの姿も似たような所はあるのではと思いますね。最近、私の幼稚園ではお母さん方を保育の中に巻き込んで、参観ではなく保育参加をしてもらっています。お母さん同士の交流を通して、お母さんの関係が変わり、気持ちもプラス指向というか良い方向に考えて、気持ちをつないでいきたいと思っています。この二年間で、子ども達の関係も少しずつ変わってきたように感じている所です。

◇子どもへの対応

――子どもの話にもどりますが、今のような通りすがりに一言捨てぜりふのようなことがあった時、C先生はどうしていますか？

C　私の気持ちとしては受け入れがたいイヤな事なので「そういう言い方は先生嫌いだな」と素直にその子に向かって私の気持ちをその都度伝えます。「そんなこと言われたら、あなただってイヤでしょ」とおきかえて言うのは大人の発想で、四歳には通じないですね。

A　その時子どもはどう反応しますか？

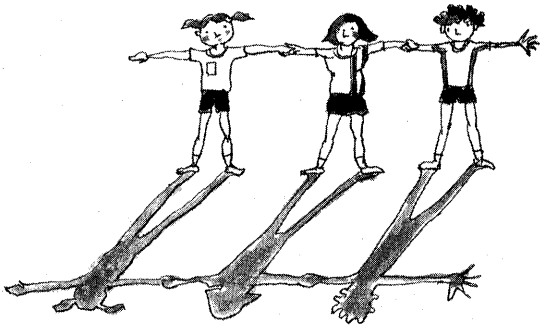
C　顔色が変わりますね。まずかったかな、というような。ある程度関係ができているから、私にそう言われる事で、〝しまった〟と思う所があるみたいですね。

A　私の幼稚園でも、同じ状況があると思います。お母さんは子どもに大人なりの考えで自分の子どものあるべき姿を伝えて育ててきたという状況も同じです。でもその子が幼稚園に入ってきたときに、最初は、私達

教師のことを親と同じ存在と受けとめ、お母さんに対していたのと同じ行動をとると思うのですが、その時に、教師が親と同じ態度をとらなかったら…、そうする事のつみ重ねで〝ここでは、今まで家でしてきたこととちがう行動様式をとってもいいのではないか〟と思うようになると思う。例えばケンカについても、自我の発達の中で、自分を素直に表現するという事はとりあえず一番大事な事で、その結果、相手にどう影響し、相手がどう反応し、それが自分に影響がきて、という相互作用の中から本当の思いやりや社会的行動を身につけていくものと思うから、ケンカはない方がいいけど、あってはいけないものではないと考える。その時、何でこの子がそうせざるを得なかったのだろうと、とりあえず考えるから、社会人として望ましい姿としてケンカをしない方がいいよ、という対応の仕方とは違ってくると思う。こういう気持ちの向け方というのは、子どもは敏感に感じます。〝この人、私に対してお母さんとちがう対応の仕方をしてくれる〟と、きっと思うようになって、そのつみ重ねが、少なくとも幼稚園の中では〝もうちょっと素直に自分を出してもいいんじゃないかな〟と思えるようになるような気がしています。今はお母さんの力って強いから、お母さんを巻き込む事も大事だけれど、保育の中で、先生がちがう価値感で子どもを認めていく。そして「ヘンなの」と言った子どもの、そう言いたかった気持ちを認める配慮ができると、その場では変わらなくとも、つみ重ねが子どもを変えていくのではないか。変えていくというより、子ども自身の感覚が変わる一つのきっかけになるような気がする。「そういうのイヤだわ」って先生が言った時に、子どもがどう受けとめるのか気になって…。もしかして、お母さんと同じ事を先生が言ってしまったら、その子に対しせっかく出しかかっていた気持ちを、また閉じさせてしまうというか、言葉の表現ではなく、言っている時の心根（こころね）のようなものを子どもは受けとってしまう。あ、先生もお母さんと同じなんだと心を閉ざしてしまうのではないか。ただ、その子との関係が育っていれば言った方が良いこともあるので、その時の言い方とか関係とかが

むずかしいと思う。子ども達にはまず、屈折せずにストレートに気持ちが出せるようになってほしい。出すなというのではなく出してほしい。ためておいたらまっすぐに出せなくなってしまうから。そこの所をとても細かく考えないと…。そこが、今の保育がむずかしくなったと言われる所だと思います。

D　この話はどこの幼稚園にもあることだと思います。別に保育者でなくとも、そのいやな言葉に含まれる影響や意味を知っている大人なら、そんな事を言う子に育ってほしくないと感じると思う。ただ〝仲良く〟というのも、トラブルをおこさない状態をキープしろという事では友達がいない状態をキープしろと言っているのと同じ事だと思う。そう思うから、子どもの気持ちが動くことが第一。気持ちが動くときには仲の良い状態やケンカの状態などいろいろあると思うが、そういう関係のついているケンカはとても意味があるのだと思う。通りすがりにイヤな言葉を言うのは、人間関係というより、心の中のモヤモヤの解消のようなものかもしれないと思う。そのとき保育者が「私はそういうことイヤ」と言うのは、部外者として言うのではなく、クラスの仲間として腹が立つの、という気分で言っている時にはとても意味があると思うが、親や社会のワクに対して異を説える能力が育っていない子どもに、それを押しつけてしまう危険性も持っているのだと思う。



◇子どもの求めているものは？

D　私のクラスにも気の強い女の子がいますが、その反面気持ちの弱い所もあります。お帰りのとき「先生なんか、もう離してあげない」と私の手をひっぱり、なかなか離してくれない事がありました。私もついのって「じゃあ私も離さない」と言って手をひっぱり返すと、幼稚園から帰れないと思ったらしく、急に泣きだしてしまったんです。自分が受け入れてもらえない状態にすごく傷ついてしまう。相手に気づいてもらえないだけで、受け入れてもらえないような気がして、自分の存在意義さえも感じられなくなるように思えました。

A　その子が「先生の手、離さない」と言ったのは、素直に「先生、手をつないで」と言えなかった気持ちがでていると思う。とりあえずはそういう言い方しかできなかったけれど、表明はしたわけ。逆に言えば、表明できるようになったわけでしょ。それに対して先生の方が「じゃ私も離さない」とひっぱり返した。さっき〝先生も仲間〟という発言があったけど、私は先生は先生なのではないかと思う。「先生、ずっと手をつないでいてよ」という思いを込めてひっぱって私の手を求めていると感じたら、私もその思いに応えてあげるため、この子の気のすむまで黙って手をつないであげたいと思う。この子はひっぱられることは求めていない。本当にわずかな力ではあっても、自分の思いと反する方向に行ってしまった。だから帰れなくなってしまうという気持ちにつながっているのかもしれない。そこの所を教師が何を読みとるかによって、次の行動が変わってくるのだと思う。子どもってそんなつまらない事にすごい思いをかけて、先生の気持ちを求めていることがあるんです。最近はあまりにそれが多いと思います。ほんのちょっとした事で、例えばじっと顔を見るとか、洋服のボタンをていねいにかけてあげることだけでもものすごく満足する、そういうのが今の子どもにはあまりにも多すぎると思う。家庭で、この子達は一体何をしてもらってきたのか、と思うときがありますね。

D　私のキャラクターから言うと、子どもと仲間感覚が

強いから、ひっぱるからひっぱり返すという対応になってしまったけれど、もう少し大人であることを要求されていたのかな、という思いはありますね。

B　私は、結構感情をぶつけていくタイプなので、そのままですね。子どもと向き合うというのは分かるけれど、一回で何とかしようとは全然思わないし、分かってあげなくてはとも思わない。思えない。子どもに感情や気持ちをストレートに出してもらいたいと思う以上に、自分も素直に出せるかな、とラフに考えてしまうほうです。だから今の話でも、たぶん私なら「ああよしよし」とひっぱっちゃう。この子の気持ちはそうだったのかと考えるよりも「いやー、悪かったわね」という感じ。人間関係とか表現の仕方というのはつみ重ねがすごくあるので、その時々の自分の出し方がマイナスの面もあるだろうし、「ごめん」とあやまる事もある。おこったときは絶対に「イヤ」とおこるし、いろんな表現や素顔があっていいのではないでしょうか。子ども達の間でもイヤだという表現はあるだろうし、それは社会的にどうというのではなく、一緒に生活している仲間なので、そういう言い方をしなくてももっとゆったりと過ごせる関係を作っていきたいなと思う。子どもを何とかしようというのではなく、この保育の時間をどうやって共に生活していこうか、とラフに考えています。どうやって伝えるかというと当然保育者の立場があるから言うときは言っちゃうけれど、仲間づらしていてもやっぱり先生は先生、先生づらしていてもやっぱり人間、という所もある。子ども達の混乱というのは、もしかしたらそこにあるのかな、とも思ったりもしますね。

◇今どきの時代性

――今の子どもの持っている問題、それにどう対応していったらいいのか、そこの所はかなり主観的になるのですが、保育者それぞれの性格などもあり、共通というのはむずかしくなりますね。E先生は今の子どもをどう思いますか？

E　私は今の事しか分からないので子どもが変わってきているのかは分かりませんが、息つく暇もなく子ども

達にあちこちひっぱられ、格闘して、気がつくと学年末という状態でした。子どもはそうしたかったのかなと思いますね。この子は一体何が言いたいんだろう、何を表現しているんだろうという場面もいっぱい。私の園ではスクールバスがあるので、その時間だけは動かせない。お帰りのときに、そこが大事とすごく思って、そのときだけでも手をしっかり握って応えてあげても満足しないものを持っている。三歳位だと言葉で表現するのはまだまだですから行為で表す。それが屈折しているのか、裏に隠れた部分があるのか分からないままに無我夢中で関わってきて思うのは、やっぱり満ちていない何かがある。安らげる何かを求めている。でも幼稚園に来る前まで母と子の間でそれがなかったのではとは言えないんです。それはよく分からない。お母さん達のお話を伺ったりしてみても、やっぱり母子関係という所に原因があるとはいえないと思っています。園で、他の先生との話題に時代性というのはよく出ますね。刺激が強く、放っとかれてぼーっとしている時間がない子とか、入園前に母子二人だけの密閉された世界ができていて手放すのが不安なお母さん。だから入園の頃は、子どもよりお母さんに園に慣れてもらう事に心をくだいたり、お母さんが担任の一言をすごく待っていたり、という事がありますね。

先程の子どもの気持ちを読みとるという事について現実的な事を言うと、気持ちに応えてあげたいと思っていても、自分を磨くゆとりがない。いいわけにしてはいけないのですが、園の生活ってとても忙しいですね。他の先生とのローテーションなどもあって…。

A　いつまで経っても「先生、先生」って言ってきますよね。三歳の頃は行動にはっきり出るので対応しやすい面もあるのですが、四歳になると人数も増え、子どもも先生が大変だというのをわきまえていて、出せないでためこんでいる所がある。そして場面場面でちらちらっと出す。細かい所でそれが感じとれるので、ていねいにやってあげなくてはと思うのだけれど、三歳のとき程やってあげられなかったり気づかないで通り過ぎてしまうことがある。だから出せない子は、ます

ます出さなくなるんです。

――以前はそういう事はなかったのでしょうか。

A　そういう子が増えているというのと、長期にわたるという事ですね。こちらは一生懸命気持ちをかけたと思ってもまだたりないという感じ。そして気持ちばかりでなく遊びも要求する。自分で歩きだせるための期間がとても長くなっていますね。その出し方も、最初から要求してある程度それをすれば平気になる子、ずっとがまんしていて、ある所になって突然密に求める子、と様々。これでもかこれでもかと思います。私としてはこれだけの人数に、私の年齢などもあり、動けない部分は精神的に補ったつもりでも、その子にとってはやっぱりたりない、もっとしてほしいというのが現実なんです。

◇子どもの少ない園では

――F先生の所はいかがでしょうか。

F　私の所は子どもが減っているので皆さんには叱られそうですが、幼稚園で二十五年やってきて、子どもは変わらないと思う。四歳は四歳児、どんな時代になっても五歳はやはり五歳ですね。ところがお母さんが変わってきている。お母さんの話すこと、幼稚園に期待すること、自分の子どもへの期待、私達がお母さんに期待するもの、お母さんへの伝え方、などはものすごく変わってきているように感じます。幼稚園での子どもの姿や実態をお話ししても「先生から言われちゃった」という感じに受け止める人が多い。私は「言っちゃった」思いはしないのに。以前は、子ども達の生活する姿を通して幼稚園の保育の姿勢をお母さん達に伝えていくと、しばらくくり返すうちに、この幼稚園は一斉に何かやるわけではないし、いっぱい作ったりもしないけど、子どもの毎日の生活を大事にしているらしいということを地域のお母さん達にも伝え合っていたように思えた。だけど最近のお母さんは、自分の子が幼稚園に入っても自分は一人お友達ができればもうそれでいい。十人と友達にならなくても、誰か一人話ができる人がいればもうそれで安心。幼稚園でのいろんなでき事も二人の間の話で満足すればもうそれで

おしまい。前のお母さん達は、何か変だと思う事があると、懇談会などでこの事はどういう事なんですか、と話題に上がったが、今はでてこない。この時期に何を大事にするかという事を伝えていくとき、今は一体どう伝えたらいいのか考えてしまいます。

――お母さんのお話が出ましたが、先程の子ども自身は

変わっていないととらえているのは？

F　変わっているのかもしれませんが、私自身の子どもに対する、幼稚園時代は子どもにとって何なのかという思いが変わっていないから変わっていないと思う。遊び方などは変わったと思うが、お母さんに伝えていくときには前と同じでは伝わらないと思うのに、子どもに対する伝え方というのはあまり変化を感じていないということですね。

――F先生は保育歴も長いので、先程からでているような先生を一人占めしたいとか、自分の中のモヤモヤを通りすがりに人にぶつけたりという行為に対してはどう感じて対応していますか？

F　その子はそういう表現なんだ、だからそういう子が多くなったとも思わない。私の地域の場合、年々子どもが減っていることが関係あると思う。ストレートに気持ちが出ないというのはお母さんに感じます。子どもにそういう子がいたとしても、卒園までの二年の間に自分は自分らしく、と変わっていく。ところがお母さんの方はなかなか変わらない。だから、お母さんと

の関わり方が今までのままではダメなのかなと思っています。

◇先生にもできる限度がある

A　F先生のお話伺うと、やはり人数が多すぎるという事なのでしょうね。私の感覚では、幼稚園のような大きな集団の教育の場ではなく、せいぜいプレイセラピーの集団の関わりの中で、セラピストの先生が一人いてケアするというような関係の中で精神的に安定できるというような感じの子も、たくさん入園してきているように思う。そういう子に対しては相当神経を使わなくてはいけない。安定して遊んでいるように見えても、その子がふっと何かを求めてきた瞬間に私がうまく対応できないと、また、背を向けられてしまうような感じを持っている。そういう子がたくさんいる。その上、遊ぶ事にも貪欲になった。視覚的な情報がすごくある中にいるので、子どもの要求してくる事がとても具体的だったり、細かかったり。自分で工夫するというより、こういう物とか、こうやりたいと、はっきりした要求を先生に対して持ってくる。そうするとやはり、一人の人間でやれる範囲は限られているので、人数が多いということはとてもしんどい状況で、私これだけやっているのに…まだたりないのという思いになってしまいます。

F　――個別的なケアが求められているということですね。

　すごい子ども達がいた学年があったんです。一人は日本人ですが入園した時は一言も発せなくて、水が大好きで水をばちゃばちゃとばしたり、紙テープをのばしてしまったり、薄紙をとばしたり…。もう一人はロシア人の男の子で日本語が全くわからない。三人目はミャンマーの男の子。この子はテレビを見ていたので日本語は少し分かるが自分からは話さない。四人目はフィリピンの子。お母さんは日本人でお父さんはフィリピン人なのですが、英語で話をする。しかも家の中だけで過ごしていたので、本人は何語で話していいか分からないせいか、いつもボーッとしている。その四人がバラバラ。残りは七人で普通の子だけど、一人はボカッと手が先に出るような男の子で、もう一人

は妹のいるやさしい男の子。あとの五人は女の子で様々な子ども達のいた組でした。何と言ってもこの四人様ご一行にふりまわされていました。いろいろあったけど、あの子達はそういう状況で入園してきたのだから、私にできる事は身の安全と、言葉が通じない分、気持ちを表したり、伝えたりという面の声はかけようということでした。

一年の半分位はその子達を追いかけている状態で、他の七人様は何をしているのかというと、その中でもぶたれたりとかいろいろあるんです。私も応じられない事はしょっ中で、子ども達も先生はあっちの事で大変なんだと考えて、用のあるときにはどうすれば先生が分かってくれるか考えて行動している。そういう所はエライ!! と思って殆んど子どもにおまかせという感じでした。別に私が全部関わらなくても、私の四人への関わり方をまわりの子が見て、先生は何であそこに一生懸命に関わっているんだろうというのを分かってくれたし、そういう大人の姿を見て自分達はこうしていこうと思ったり…。それはやはり三十人の集団では見えない。四人+七人。十一人だったから四人以外の子にもよく見えたのでしょうね。やはり人数の限度はありますね。

A　前の子ども達はそういう面があったんです。だけど今の子は先生がふり向いてくれないと幼稚園にきたくなくなっちゃう程のレベルなんです。現実に二人来られなくなってしまったのです。もっと大変な女の子がいて、その子に神経をとられてしまう。三歳の時は人数が少なかったので、二人にもそれなりにできていたのですが、四歳になって人数が増えケアの程度が減ったので、三人ともとても大変になってきました。子どもにとっては深刻な事態なんです。幼稚園はそこまでやってあげなくてはいけないのかと、正直思いますね。

◇お母さんはどう受け止めているか

C　その子のお母さんはどうなのですか。幼稚園や先生に求めるものは何なのかしら、それともお子さんの大変さを話さないというか、あまり感じていないので

しょうか。

A　家庭の中では親子関係の中で成立しているので、幼稚園に入れてはじめて自分の子が行動をおこして気づく。お母さん自身はそれを困った事とも大変な事とも受けとめていなかったと思う。一番大変なしゃべらない女の子の場合、家庭ではちゃんとしゃべっていたのに、お母さんとしては幼稚園にきて初めてそういう状況がおこったというのが分かった。他の二人についても今まで別に困ったことは何もなかったので、それが普通と思っていたお母さんに、幼稚園での行動をそのままそうなのだ、と受け入れてもらうのは、今までもずい分話しましたけれど、とても大変な事です。お母さんとの関係がむずかしいという風にも感じていて、今は幼稚園だけでどうにかなるレベルではないと思っています。でも現実に幼稚園に来ている子だから、何とかしてあげたいと思う。

F　でも仕方がないでしょ、先生は一人しかいないし、三歳までは何とかきたけれど、四歳になってクラスの状況が変わってしまったから。仕方がないといったら残酷かもしれないけど…。

◇先生を求める

A　一人はものすごくお母さんとの距離ができていないという感じが強く、幼稚園でもお母さんへと同じものを私に求めてきます。だけど、家庭ではお母さん一人に子ども二人。現実には私はそこまでしてあげられない。私なりに気持ちはかけていますけど…。

F　だけど、前に比べると、友達より先生を求めるという子どもの姿は何なのでしょうね。

A　今、極端にお母さんと離れられなくなってしまった状況ができているという話がでましたが、そうでなくても子ども一人一人にそれを感じますね。ちょっとしたすり傷でもていねいに手当てしてほしいとか…。

G　家庭でお母さんもすごくていねいにやってあげているのではないかしら。

A　やってあげているのでしょうか。逆のように思えるけれど。ちがう事、例えば何かできるようになる事などの方が大事だと思っていて、子どもの本当にやって

もらいたい気持ちを支えてあげていない。世の中の傾向がそうなのかなという気がしますね。

◇お母さんに伝えるのはむずかしい

G　家庭の生活の中で、やりすぎたり、必要なことをやっていなかったりする子どもが入園してくる。お母さんは自分の子の状況が分からない。本当は親が一番分かっていなければならないのに…。子どもとの関係もそうだけれど、親との関係をもっとつけなくてはいけないのでしょうか。

A　お母さんにそんな細かい所まで理解してもらうのはすごくむずかしいです。なかなか価値観の転換をしてもらえないから。話をしてもお母さんにうまく伝わるにはある程度の時間が必要で、実際にはそんなにたくさんはできません。まして、お母さんが自分なりに理解して「うちの子にはこうしなくては」と思い、こちらの思ってもみない方向に向かうのなら何もしないでもらった方が…、とも思ってしまいますね。そういうお母さんも多いですから。

F　でも幼稚園でやるには限度がある。幼稚園は八時半から一時半までですから、あとの時間はやはりお母さんとの方が長い。食事だって幼稚園では昼一回だけれど、お家では朝夕二回ある。ヒロちゃんはお弁当ボロボロこぼして、おはしで上手に食べられないみたいだから、ちょっとお母さんがそこを見てあげたらと思って話をしても、お母さんは受けつけない。かえって否定されてしまう。「うちではこぼさないで普通に食べていますよ」というこたえ。でも幼稚園でこんなにボロボロこぼして食べられない子が、家でおはしでこぼさないで食べるとは思えないんですよね。「おうちみたいにお茶わんで食べてみる？」といろいろやってみましたけど、やっぱり食べられない。あ、お母さん、そういうのを認めるのがイヤなんだな、じゃあその事を言うのはやめよう。でも、ちがう場面でどう言ったらいいのだろう。「こうですよ」と言われるのはイヤらしい。入園当初から比べるとここができるようになったというような事、ウソは言えないので何かさがして…、おもちゃを一つかたずけられるようになった

ので、おうちでもほめてあげてねと言うと「あ、そうですか」これで終わりなんです。あーこれもダメなんだ。その子を見ていると愛情がたりていないのではと思ってしまいますね。お母さんの話をきくと、「あの子の面倒を見るのめんどくさい」って言うんです。一人しか子どもいないのに。だけどお弁当袋や手さげ袋は手作りで作ってくる。子どもの話はやめにして、「なんだ、めんどくさいって言ってながら、こういうのは上手なのね」と袋の作り方を教えてもらう話から入っていくようにしようと思った。子どもの方は手がかかりますよ。すごく求めているし。でもその時は目に見えなくてもしばらく経つと、表情がでてきたり、おこったり、物を投げたらやり返すようになった。いろいろ反応が変わってきて、私はそれをうれしいと思った。他の大人もヒロちゃんの変化に気づいてくれるのに、肝心なお母さんはまだ受け入れられなくて、ちょっと言えば「そんなこと言われても、うちの子みたいな子は世界中さがせばどこにでもいますよ」なんて返ってくる。どういう風に言ったら…。今のお母さんとの親子関係についてふれたいと思うと、とてもむずかしいものを感じますね。子どもも変わっているのかもしれないけれど、それをどうお母さんに話していけばいいのか…。絶対、前と同じ関わり方ではダメなんです。

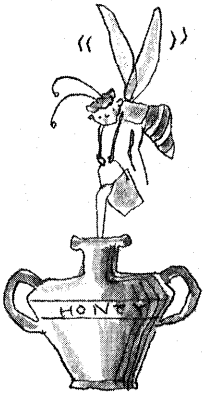
D　そういう話をきくとお母さん自身に〝母としてもっと変わりなさい〟という前提があるように感じてしまいますね。他人の子だからこのレベルで喜べるレベルと、生まれた時からずっと見ていると余程な事がない限り、小さな変化は見えないのでは、という感じもしますが…。

F　このお母さんの例だけでなく、一般的にお母さんと接する時に、一緒に考えていこうとすると一方通行で切られてしまうことが多い。やはりお母さんと保育者のコミュニケーションがスムーズでないことは良くないと思うので、お母さんが変わるどうのこうのではなく、今までの言い方ではダメ。私としてはパッと切られてしまわない親と保育者の関係を作るにはどうしたらいいのか、考えてしまいます。

◇幼稚園が用意する？

C　私の幼稚園では一昨年から、家庭との連携をどうしたらとれるかという事についていろいろ考えてきました。それまで、お母さんとは毎日朝と帰りに顔を合わせているのに、その割には情報が伝わってこないし、こちらの思いも充分伝えきれないというジレンマがずっとありました。それでお帰りの時に毎日一人ずつ個別にお母さんと話したり、先程も言いましたように幼稚園の行事に参加してもらうことで、子ども達が気持ちをのり越えていく姿を感じとってもらったり、幼稚園での子どもの生活を知ってもらいたいと思ったからです。そういう機会を用意したことで、お母さんが子どもの気持ちを理解したり、伝え方のへたなお母さんがやわらかい表現ができるようになったり、その事で子ども同士の関係までうまくいって受け入れられるようになったり…。行事の多い幼稚園だ、と文句を言いながらも、変わってきた場面が多く見られました。大変な事もたくさんありましたので、この試みがいいか悪いかは別として、親と保育者の一対一のコミュニケーションも少しずつつっこんだ話ができるようにもなり、お母さん達も自然にいろんな事が感じられるようになってきたんだなというのが今の実感です。

F　私達は今まで、幼稚園は子どもを保育する所だと思って、子どもとどう関わっていこうかという事を一



生懸命考えてきて、それでお母さん達に通じる部分はたくさんあったんだけれど、最近どうもそこがうまくいかない時代になってきた。一対一で何かするというより、お母さん達の気持ちがほぐれるというような考えがこれからの幼稚園には求められるのかしら。

C　そうなんです。お母さんも本当に自分のやりたい事を探しているんです。それが見つかると、気持ち一つで、乳飲み児かかえてても出てきて一緒にやってくれるんです。そういう場が持てるという事が今のお母さんには重要で、それでまた、別の気持ちで子どもと向き合い、いい関係を作っていけるという事があるのかなと思います。

F　そういうのあるかしら。個人的にお母さんと関われば関わる程、変なふうになるなら、幼稚園は幼稚園で子どもの変化を喜びながらやっていくしかないと思ったときもあり、それは少しさみしいと思いましたね。

A　みんな余裕がないから、先生に何か言われると、母親が悪いと言われているように思う。こちらはそんなつもりがなくても、お母さんは子育てで手一杯、余裕がない。お母さん自身の子どもに対する気持ちが変わらない限り細かい事を言っても、言われた事への対応しか考えないので困りますね。

B　伝え方がむずかしいと思うのは現象を伝えてもその対応策ばかり考えてしまうから。別に、幼稚園で失敗しないようにして下さいと言っているのではなく、そういう状況をふまえた上で、気長に子どもを見ていきましょう、と言っているのに…。ケンカしないように一緒に帰るのをやめてしまうなんて!! どうして公けの場で何もしないような対策しか考えないのか。弱みを見せないんですョ。もっといろんなものをさらけ出していいと思うんですけど、できないはできない、そこから始まっていこう、というのですが…。

◇幼稚園の役割はどこまでか

D　今のお母さんはいろんなプレッシャーの中で過ごしているように見えて、お母さん自身が自己肯定感を持てず、安定したがっているように思えます。お母さんの事はむずかしいのだけれど、前のお母さんだったら

子どもが育つのを見ていて自分も育っちゃう部分があった。子育てで母が育つのは、学校教育の側から見ると、プラスαの部分で、もしも幼稚園がお母さんを育てていく事までするのなら、公教育は親子を育てる場になろうとしているんでしょうか。

A　現状では、積極的に揚げるのは難しいのではないでしょうか。大事なのは子どもの保育だと思うから。

F　私は今までずっと保育の場にお母さんが入ってくるのには抵抗がありました。それは、幼稚園は子どもに開かれている場だから、それはしたくないという思いがあった。だけど今、お話を伺っていていろいろやってみようかなと思いましたね。

A　お母さんに対しても保育と同じではないかと思う。一人一人状況もちがうのでお母さんに対する対応の仕方も個別に考えていかなければならない時代なのかもしれませんね。

――今、子どもが慣れるのに時間がかかるというのは、親が自分を出せるという感触を持てないので、その分ひきずって長びいているのでしょうか。

E　今は親子の結びつきが強くなりすぎて、親が子どもを放っておけなくなっている。子どもは放っておかれるのがすごく不安。幼稚園が子ども主体だとすれば、子どもにとって放っておかれる唯一の場なのではないでしょうか。文化的にも社会的にも、他のものは全部管理された時代だから、もし最後の砦があるとすれば、それは幼稚園だと思います。でもその自由さ、何をしてもいい状態というのが、逆に子どもの不安を招いている所があるような気がします。

――子どもの問題から親の問題へ話が移ってきたようですが、子どもそのものに関してどんなに頑張ってもそれだけでは解決しなくて、親が心を開くという、子どもとの関わり以上にむずかしい問題を今の保育現場はかかえているという事だと思います。実際、親が先生に対して態度を変えると子どもっておもしろい程変わってくるというのが、私のセラピーの経験を通しての実感です。親と保育者との関係はとても大切なのですよね。

お話はまだまだ続くと思いますが、本日はここまで

にしたいと思います。長時間にわたってありがとうございました。

――終――

子どもも大人も、どこかで生きにくさを感じているようですね。親としては、ちょっと耳のいたい話でもありました。子どもだけでなく、大人も、わかってくれる人、受けとめてくれる人がほしいのでしょう。連携という言葉の生の姿を、これからも探っていきたいと考えています。

（田代）

＊

この座談会につきまして、読者の皆様方のご意見、ご感想がございましたら、編集部までお寄せ下さい。

今回は保育者サイドのお話でしたので、是非、お母さん方からのお考え、実態、ここがちがうという反論など、本音の部分のお話をお待ちしております。

（編集部）

幼児の教育

第九十三巻　第八号

（一九九四年八月号）

定価四五〇円（本体四三七円）

発　行　平成六年八月一日

編集兼発行人　本田和子

発行所　日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二―一―一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所　図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五―一二―一

発売所　株式会社　フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

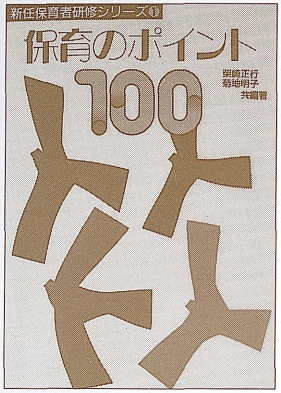
六―一四―九

☎〇三―五三九五―六六〇四

振替口座　東京九―一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。



新任保育者研修シリーズ

①保育のポイント100

保育者が直面するさまざまな保育の問題点に保育のエキスパートの方々が要点整理を示した解説書。保育現場で行き詰まった時の解決策の手がかりがつかめる保育資料。園内や地域の勉強会や研修会の参考資料に役立つ。

柴崎正行・菊地明子／編著

A5判・232頁・定価2,400円（税込）

新任保育者研修シリーズ

②援助のポイント100

援助によって保育が変わる。援助の考え方、援助の仕方を中心に保育現場で直面する問題点100項目を取り上げ、項目毎に実践事例に解説する方式で保育方法を整理した実践書。それぞれに保育者のアイデアが生かされていて、保育の行き詰まりの具体的な解決策がつかめる。

柴崎正行・著

A5判・236頁・定価2,400円（税込）

新任保育者研修シリーズ

③環境のポイント100

環境によって保育も変わる。環境の生かし方、与え方を中心に保育現場で直面する問題点100項目を取り上げ、項目毎に成功実践事例に解説を加える方式で保育方法を整理した実践書。環境の生かし方の具体的な参考資料となる。

柴崎正行・著

A5判・236頁・定価2,400円（税込）

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

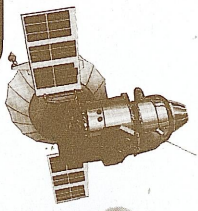
キンダーブックの
フレーベル館

幼児の探究心を育てる図鑑、小学校の「生活科」にも役立つ。

ふしぎがわかる しぜん図鑑

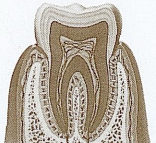
全10巻 完結

監修　東京大学名誉教授　水野丈夫



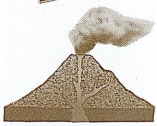
●第1巻
こんちゅう
監修　元東京都多摩動物公園園長　矢島　稔

●第2巻
どうぶつ
監修　東京都上野動物園園長　増井光子



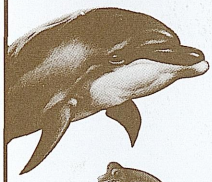
●第3巻
しょくぶつ
監修　園芸研究家　浅山英一

●第4巻
みずのいきもの
監修　国立科学博物館　武田正倫



●第5巻
とり
監修　東邦大学理学部　長谷川　博

●第6巻
ひとのからだ
監修　愛育病院小児科部長　岡本　曉



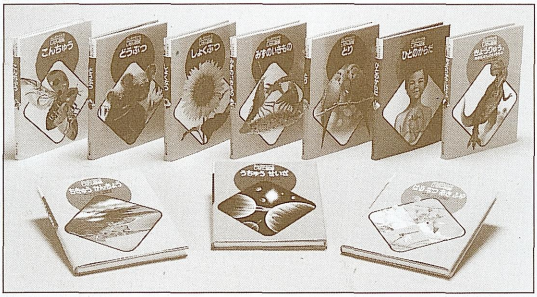
●第7巻
きょうりゅうとおおむかしのいきもの
監修　国立科学博物館　小畠郁生

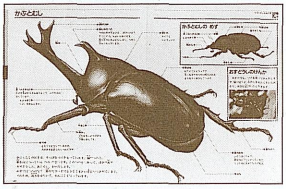
●第8巻 新刊
ちきゅう かんきょう
監修　放送大学教授　奈須紀幸

●第9巻 新刊
うちゅう せいざ
監修　五島プラネタリウム館長　村山定男

●第10巻 新刊
はる なつ あき ふゆ
監修　理科教育研究家　中山周平

A4判・上製本・本文116頁・定価各2,000円（税込）





- スーパーリアリズムのワイドな画面によって自然界への関心を高め、そのふしぎさに気づいていきます。
- 基本的な図鑑としての役割を十分にはたしながら、子どもたちの探究心や科学する心を育てます。
- なぜだろう、どうしてだろうといった疑問に答える記事もとりあげました。豊富な写真とイラストを組み合わせで、眺めるだけでも楽しい構成です。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部 03（5395）6608（代）にお問い合せください。

キンダーブックの
フレーベル館